氏　　名　津田謙治

学位(専攻分野)　博　士（文　学）
学位記番号　文博第438号
学位授与の日付　平成20年3月24日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　文学研究科思想文化学専攻

学位論文題目　マルキオン思想の多元論的構造
――プトレマイオス及びヌメニオスの思想との比較において――

論文調査委員　教授 片柳榮一（主査）　教授 中畑正志　准教授 芦名定道

論　文　内　容　の　要　旨

本論は初期キリスト教思想における多元論的構造の一端を異端的思想家マルキオンの教義を分析することによって明確にすることを試みるものである。マルキオンは紀元後二世紀のローマ近郊で活躍した思想家であり，彼と類似して神的な多元論的構造を説くプトレマイオスとヌメニオスの思想との比較によって，本論では研究が進められる。

第一章においては，マルキオンの多元論的構造を分析する研究史と方法論，及び本論にて扱われる資料の吟味が行われる。マルキオンはキリスト教において「善の神」と「義の神」という二神の分離を説いたのであって，この分離，もしくは多元論的構造を持つ教義は如何なる思考に基づいて現れたものであるかが特に20世紀前半から議論されてきた。その議論を簡略的に纏めるならば，主に三つの潮流があったと言える。一つ目は聖書解釈もしくはパウロ神学の極端化とも言うべきものであって，律法の持つ応報・復讐性と，福音の持つ慈愛性とを対立させ，そこからマルキオンの二神を分析する潮流である。二つ目としては，当時の異端的な思想といえるグノーシスによる影響と捉えるものであって，例えば多くのグノーシスに見られる創造神の悪神化・低神化を持って至高神と対比させ，マルキオンの多元論的構造を導き出す潮流である。そして最後に三つ目としては，当時の哲学，特にプラトン主義などに見られるイデアと造物主との区別から，至高神と創造神との分離を捉えるものであって，ここからマルキオンの二神論を捉え直す潮流である。これら全ての分析は一定の意義を持つものであるが，限界があるとも言わざるを得ない。第一の潮流においては，聖書解釈からマルキオンの質料概念を明確にすることは不可能であるし，第二の潮流においては，そもそもグノーシスの定義が不明瞭であり，マルキオン思想と類似している部分が羅列・列挙される類の研究に終始してしまう場合が多い。第三の潮流においては，比較する対象の軸が明確にならず，例えばマルキオンと中期プラトン主義との比較は，第二の潮流と同じような傾向に陥る場合が多かったと言える。従って，本論は比較の対象を明確にし，マルキオンと同時代かつ同じ地域で活躍した二人の思想家を取り上げ，単なる類似と非類似だけではなく，彼らの多元論的構造の根底には何が問題関心として存在していたかを分析し，そこからマルキオンの思想の研究を深めようと試みるものである。

第二章においては，三人の思想家の神的性質の多元論的構造を鳥瞰図的に捉えようと試みる。第三章以降はそれぞれの性質を単元ごとに追い，細かく分析することになるが，それによって全体図を見失わないためである。マルキオンにおいては，救済を行う「至高神」，そして至高神より遣わされた「至高神のキリスト」，我々人間と地上的世界を造り出した「創造神」，そしてこの創造神が契約を結んだユダヤ教徒を救い出すとされる「創造神のメシア」，更にこの創造神が世界の生成の際に用いたとされる「質料」とを分析の軸にする。プトレマイオスにおいては，善そのものである「完全な神」，そしてこの神の模倣者であり，世界の生成と律法をユダヤ人たちに与えた「創造神」，そして彼らの敵対者である「悪魔」とが分析の軸になる。ヌメニオスにおいては，善のイデアそのものであると理解される「第一の神」，そしてこの神の似像であり世界の生成に関わる「第二の神」，第二の神が物質的な性質に触れる際に分離されるとする「第三の神」，そして感覚的世界における悪の原因とも捉えられる「質料」である。

第三章においては，「至高神」概念が分析される。マルキオンはこの神を創造神よりも優れた神であると捉え，今まで誰にも知られることはなく，善なる神であると理解する。従って，この神はユダヤ人たちが神と仰いだ世界と人間の創造の神ではないし，預言者たちが伝えた神でもない。この神はただ慈愛の原理によって，人間の魂を救う神である。この神よりキリストが到来し，十字架に架けられることによって自らの血を流し，人間の魂を創造神から贖ったとされる。このキリストには，至高神そのものと一体化するような様態論的特徴と，物質性を排除する仮現論的特徴が見られる。プトレマイオスはこの神を唯一完全な神であるとし，完全であるが故に一であり，善そのものであると理解した。彼の救済者概念はあまり明確ではないが，恐らくこの完全な神に由来するものであると捉えられる。ヌメニオスはこの神を第一の知性，もしくは善そのものであるとし，プラトンが『国家』で言及した善のイデアと同一のものであると理解した。この神自身は世界と万物の生成に直接関わったわけではないが，あらゆる存在の根拠としてヌメニオスは理解していた。これら三者の至高神概念は，特に善という性質について共通性が見られるが，マルキオンが最後の審判を行わずに救済する点に至高神の善を見出そうとしていたのに対し，プトレマイオスやヌメニオスにおいては，存在の根拠を善という言葉で表し，それがこの神の善であった点がマルキオンとは明確に異なっている。また，これに関連して，この神の摂理はマルキオンにおいては，救済の一点にのみ働くが，プトレマイオスやヌメニオスにおいては，常にこの神の善が摂理として万物に働いている点も両者の相違であると言える。

第四章においては，「創造神」概念が分析される。マルキオンはこの神が旧約聖書で語られた通り，世界と万物を六日間で造り出した神であり，律法をユダヤ人に与え，メシアを遣わしてユダヤ人を救う神であると捉える。しかし，この神は同時に復讐と懲罰の神であって，ユダヤ人以外の民族を虐殺することを命じ，戦争を好み，怒りによって民を裁く神でもある。この点からマルキオンはこの神を義の神と見做すのであるが，その意味は応報的であり，この神が時折自らの無知を晒け出すことからも，ある種限界を持った神として理解される。プトレマイオスはこの神を創造の神であり，律法を人間に与えた神であると理解し，この点においてはマルキオンと同様である。この神は善でも悪でもないとされ，中間者として理解されるが，善なる者の似像であるという点でより善に近い神である。マルキオンがこの義を否定的に捉えたのとは対照的に，プトレマイオスは極めて肯定的に理解している。ヌメニオスはこの神を世界の製作者として理解し，叡智的な世界と感覚的な世界との双方に関わる者として，二重の者と見做す。第三の神は，質料に触れるときにのみ，現れるものと理解されている。この神はプトレマイオスと同様に，善の模倣者として位置付けられている。

第五章においては，「質料」概念が分析される。マルキオンはこの概念を明確にはしていないが，創造神がこの質料を用いて世界を生成し，それ故に創造神と同じように生み出されず，造り出されず，永遠な原理のようなものと理解される。また，マルキオンはこの質料を明確に悪であると捉え，恐らくこの地上的世界における不完全なものの根拠にこの質料の悪を置いていることが推察出来る。プトレマイオスは質料という概念には触れていないが，完全な神に敵対する悪魔が質料的であると述べている点から，極めて否定的な要素と結びつけていることが分かる。ヌメニオスは質料が二であり，故にあらゆる分離を生み出すこの要素によって，第二の神が第三の神と分離するとも述べている。感覚的世界は第一の神または第二の神の善なる摂理が働いているが，その世界にも悪があるのは，この質料が悪であり，原因となっているからである。この点はマルキオンと同じ解釈が見られる。

第六章においては，ここまで分析してきた諸概念をその関係性において相互に考察する。ここでは，「至高神」と「創造神」，「至高神」と「質料」，「創造神」と「質料」，そして最後に三者の総体的な関係を考察する。至高神と創造神は，ヌメニオスにおいて静と動，そしてマルキオンやプトレマイオスにおいて善と義という関係として捉えられる。第一の神は静であるが，これは純粋に動かないというわけではなく，この無為性そのものがこの神の運動であると理解される。この点で，「ある」と同時に「あらしめる」という静と動が一体となった思考が，この至高神に類比される。この神は自ら万物を生成するわけではないが，あらゆる存在の根拠となっている点で存在の生起である。このような思考はヌメニオスだけでなく，プトレマイオスにも類似した思考が見出されるが，マルキオンには見られない。マルキオンにおいて，万物の存在の根拠には，善のイデアに相当する至高神が位置付けられることはなく，むしろ，地上的世界の一切の万物は，この至高神とは断絶している。これはヌメニオスやプトレマイオスの思考とも異なるだけでなく，他の同時代的な諸哲学やグノーシスと比較しても特異である。また，善と義であるが，プトレマイオスが創造神の義を完全な神の善の延長線上に捉えようとするのに対

し，マルキオンはこの義を善とは対立する応報的なものと理解し，ここにも善と義との間に明確な断絶を見出そうとする。至高神と質料に関しては，ヌメニオスが両者の間に創造神を中間者的な存在として位置付けるが，マルキオンは両者を結び付けず，あくまで無関係なものであるとする。マルキオンにおける至高神は，むしろ無からの創造を思考し，質料とは一切の関わりを持たない。創造神と質料の関係に関しては，感覚的もしくは地上的世界の生成の説明として両者の役割が明確になっている。この際に，マルキオンとヌメニオスにおいては，悪は何に由来するかと言った神義論的な問題が，質料との関係から考察されている。ヌメニオスが創造神の善を疑わず，質料のみに悪を帰しているのに対し，マルキオンは地上的世界の悪を質料だけでなく，創造神にも帰している点は神義論の解決の筋道が根本的に異なっていることを示している。これら三者の神的な諸概念とその多元論的構造は，主に生成論と救済論において問題とされたものである。生成論に関して言えば，ヌメニオスもプトレマイオスも，神と質料という二元論的構造が見出されるが，基本的には万物が至高神によって秩序付けられ，摂理が働く構造になっている。しかし，マルキオンの場合，この至高神はあくまで断絶した位置付けになっている為，むしろ至高神と創造神という二元論的構造が明確になっている。また救済論に関して言えば，プトレマイオスにおいて，救済は地上的世界の補完，完成であり，あくまで完全な神と創造神の業との連続性が見出される。だが，マルキオンの場合，救済とは地上的世界からの脱出であり，至高神と創造神とは最初から最後まで分離し，両者が相互に補完されたりする関係にはならない。

第七章では，第六章までの分析が短く纏められ，これらの分析によって明確になった点などが再び挙げられ，結論へと導く。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

紀元後二世紀のキリスト教世界を震撼させたのは、マルキオン思想の出現であった。この時期パウロの福音思想を唯一人理解したのは、マルキオンであったが、その理解は誤解であった、と著名な教会史家ハルナックをして言わしめたように、マルキオンはパウロが宣べ伝える、罪人を義とする義認の神のうちに、途方もない新しさと価値転換を認めたが故に、この神は旧約の義と裁きの神とは根本的に異なる神であると宣言した。当時まだ明確な形をとっていなかった新約聖書のうち、イスラエル民族の神ヤーヴェとの連続性を主張する語句を排除して、自らの思想に合致した独自の新約聖書を編纂さえしたのである。現在の形の新約聖書はこのマルキオン聖書に対する対抗の動きとして成立したとさえ言われる。この古代教会最大の異端者であるマルキオンに関する研究は、上述のハルナックの記念碑的研究以来様々な観点からなされてきた。研究の三つの大きな潮流を挙げれば、一つは、律法と対立する福音というパウロ神学の極端化として捉える流れであり、第二は「覚」を救済と考えるグノーシスの二元論的思想のうちにマルキオン思想を置いて考察するものであり、第三の流れは、当時のヘレニズム哲学思想との連関において捉えようとするものである。論者も同時代の思想家、グノーシスに属するプトレマイオス、新ピタゴラス主義者といわれるヌメニオスとの比較においてマルキオンの思想の特徴を改めて浮き彫りにしようとする意図において大まかには第三の流れに属すると言えよう。異端者のゆえにマルキオン自身のテキストを欠き、出典をすべて非難する側のテキストに求めねばならないという研究の制約と困難を抱えるなかで、論者は忍耐強く批判的にテキスト解釈しつつ、同時代の他の二人の思想家と比較しながらマルキオンの特異な思想を浮かび上がらせている。研究の主たる成果は次のようである。

Ⅰ　至高神と創造神に関するマルキオンとプトレマイオスの比較を通して、マルキオンの至高神の謎めいた特徴が一層浮き彫りにされた。プトレマイオスの至高神が不完全なこのコスモスの創造神と対立しながら、しかも最終的にはその善によって全体を統一保持しているのに対して、マルキオンの至高神は、これまでまったく知られざる神として、このコスモスの創造神と対立している。マルキオンの徹底したこの世界に対する否定的態度に対して、プトレマイオスはグノーシスに由来する二元論にも拘らず、最終的には至高神の善による統一を考えている。プトレマイオスのグノーシスの哲学的側面が伺われる。テルトリアヌスが執拗に攻撃するごとく、この世界にまったく知られていなかったこの世界とは全く異質な神という概念は論理的弱点、矛盾を抱えている。にも拘らずマルキオンが徹底して「異なる神」を主張したことの異様さがあらためて際立たせられた。

Ⅱ　論者はヌメニオスに対するプラトンの影響を丹念に辿る中で、ヌメニオスが第一の神と第二の神を分けねばならなかっ

た最終的理由が、善のイデア的なものを彼が第一の神として捉え、この世界からの超絶性を重要視したためであることを明らかにした。もちろんプラトンの流れをくむヌメニオスはグノーシスのプトレマイオス以上に、究極的な第一の神によるこの世界のいわば間接的統合を見据えてはいるが。ヌメニオスの多神論の構造が、究極的なるものの超絶性に由来するという指摘は重要である。多神論的構造が必ずしも幼稚な神話的思考にのみ由来するのでなく、絶対的なるものの徹底した探求からも生まれるということを示唆しているからである。マルキオンの知られざる神という特異な思想も単なる神話的思考に由来するのではない可能性を考えうるのである。

Ⅲ　論者はマルキオンのキリスト理解の一つの特徴として、彼がキリストの十字架の苦難を強調していることを挙げる。全体としてマルキオンは仮現論（キリストが真に肉体を取ったのではなく、仮に装ったとする考え）的に思考していたと考えられているが、キリストの十字架の苦難の強調は、マルキオンの救済思想が単なるグノーシス的覚知ではなかったことを暗示するものと論者は解釈し、マルキオンの思想が一筋縄ではいかない多様な側面をもっていることを改めて教える。

Ⅳ　この研究の最も大きな成果は、キリスト教という一神教の一つの代表ともいえる宗教の成立期において、二つの神を主張するマルキオンの思想があれほどの勢力をもって初代教会を脅かしえた当時の精神的状況の一端を覗かしめたことである。論者も論文の結論として「マルキオンの神的性質の多元論的構造は、紀元後二世紀におけるヘレニズム及びユダヤ的思想の潮流において、キリスト教内部で一元論を説くことが見かけの自明性とは異なり、それほど自明なことではなく、むしろ様々な困難を抱えていたことを示している」と述べている。論者は一神教という思想を既に出来上がった体系としてでなく、生成途上にあるものと捉える。多様な現われを持つ世界に多様な願いをもって生きる人間にとって或る意味でより自然である多神教的環境の中で、イスラエルの預言者以来の厳しい宗教倫理に由来する一神教的宗教思想が自らを貫徹する際に直面した困難の一つの典型をマルキオンの「知られざる神」の思想のうちに論者は見ている。

資料の扱いも慎重で、また最新の研究成果をほとんど渉猟、網羅したうえで独自の解釈をなしている整った論文であるが、マルキオン思想の比較に何故他の人でなく、プトレマイオスとヌメニオスでなければならないかの説明が十分でないなどの指摘もなされうる。しかしそれはこの論文の価値を著しくそこなうものではなく、叙述の工夫によりあらためうるものである。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十年二月二十日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。